

婉という女

大原富枝



新潮文庫

えん 婉 と い う 女 おんな

定価はカバーに表示してあります。

新潮文庫 草 129 A

昭和三十八年六月二十五日 発行
昭和五十二年二月十五日 二十四刷

著 者
大 おお 原 はら 富 とみ 枝 え

発 行 者
佐 藤 亮 一

発 行 所
株式 新 潮 社

郵便 番号 一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話 業務部(〇三)(二六六)五一
編集部(〇三)(二六六)五四二一
振替 東京四一八〇八番

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛ご送付
ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

新 潮 文 庫

婉　　と　　い　　う　　女

大 原 富 枝 著



新 潮 社 版

目次

ストマイつんぼ……………七

婉という女……………五三

自作解説……………一〇五

婉
と
い
う
女

ストマイつんぼ

——第七感界の囚人——

——もうずっと以前から、わたしは左右のからだの不均衡感に悩まされていました。

左の肩の上に、なにか雲母うんものようなヘンペンとしたものが絶えずシンシンと降りつつけて、そのために左の肩が少しずつ沈下していつて、胸の中にメリこんでゆくのです。

それにつれて胸の中に凝縮作用が起つて、小石のようなしこりになり、拳ほどの塊りになり、やがて胸一面が重く、固い板になってしまふのです。

左肩は沈下していつて右の肩との差が十センチほどにもなり、胸がおッそろしく膨れあがってきて、新聞で見たメキシコ絵画の圧迫された民族のように、わたしは畸形化してきます。

こらえきれなくなつて、わたしはピクリと左の肩を吊りあげて均衡をとり戻すのですが、その奇妙な均衡運動の間隔が日を追うて短くなつていつて、おしまいには無意識にぼうふらかなにかのように、ピクリピクリを繰り返しているのです。

熱に対する反応がまたわたしを苦しめました。火鉢やストーブの傍にいと、左半身が頬も耳も歯も、異常に内部から燃えはじめるのです。まるで可燃性のガスが充満していて、そこに引火するのかわかれるのです。

心は漠然とした不安に押し包まれているのですが、ハッキリ不安という言葉で意識することはなくて、実体感のないボワボワとした時間や、手応えのない思考が、わたしの周りをぐるぐる環流していました。

ずいぶんたくさんのことを考えたつもりなのに、一日が暮れるとき、わたしは何にもしないで呆やりと坐っているだけなのです。誰も命令しないのに、わたしは囚人のように一日中じっと坐っていて、ひどく孤独でした。

厚いもやの層が外界からわたしを隔てているのでした。

——自分のなかに、からだのなかに、何かが起りかけている、ある日、愕然とわたしはそう思いました。

烽火のようなもの、謀反の兆し、わたしの命令に服さない一塊の細胞組織があるのを感じたのです。からだの中のどこかが破壊されているのを、わたしは突然自覚したのです。

あッ、あいつ！ そうだ、あいつ、かも知れない——わたしは悲鳴のように「彼」のことを思いました。

この十年ほどの間を、わたしは健康に過してきたつもりでした。けれど彼（結核菌）はじっと

息を潜めて、勢力挽回の日を眈々^{たんたん}とうかがっていたのでしよう。彼にとっては、革命のように、必然性のあるものだったのかも知れません。

わたし自身が、この十年あまりの、せっかく健康に恵まれていた（？）間の、自分の怠慢な、いいえ、アクセクと勤勉な、生き方に大いに不満であったと同じに、彼にとっても、昔の数年間の療養によって、自分を完全に駆逐した、と自惚れているわたしの傲慢^{ごうまん}さは、一度打ち据え、懲らしめてやらねばならないものだったのでしよう。

僅か数年間の療養によって駆逐されるには、自分の破壊力、潜在力は偉大すぎるのだ、ということ、そしてまた、人類はまだ自分を完全に屈服させてはいないことを、彼女は知るべきだ、と彼は考えたのでしよう。

レントゲンの結果は、左右の肺に昔の病巣の石灰化した跡を点々と映しましたが、左肺にひとところ、いま新たに活動しはじめている病巣をも映しだしていました。そこは一番古い病巣であって、いまはまた一番新しい病巣でもあって、たとえば再活動を始めた休火山の感じに似ていました。

彼の偉大な持久力と潜在力とに、わたしはいさぎよく屈服するほかはありませんでした。そして、こういう挫折感^{なげ}はわたしの貧弱な人生にとって、決して馴染^{なじ}みのないものではなかったことを——娘時代の療養生活中も、また健康な人間に混ってともかく働いて生きてきた、この数年の仕事の場においても——思いました。

彼、ともう一度、力をつくして闘争してみることに、微かな、生命を揺すぶるものを感じたのです。

突然変異というものが必ず伴なってくるある新鮮さは、凶事であっても例外ではないのでした。うんざりするものといっしょに、一つの吹っきれた爽かさに似たもの、疲れた生活を洗う休息、初々しくて平安な時間の流れの予感がありました。——自分のなかのあいまいな部分、なんとなくいつも気になっていた部分、それは肉体と精神とに共通してあるもので、それを見極めようとすることは、凶いことがキツカケであっても爽涼感をもっているものでした。

女　　う　　い　　と　　婉
ストマイもパスもヒドラジドもなかった昔、十年近い年月の闘いで彼を屈服させた（と信じていた）わたしの忍耐は肉体に現に左右の肩が高さで一センチ、幅で二センチの肩胛骨の歪みと差になって、明確に残っていました。この事實は勝利の証拠のようにわたしを安心させていましたが、いまとなつては裏切の証拠なのでした。

けれども観念して肚を据えてみると、十七歳の日からわたしのなかに巣喰っている彼に対して、わたしはひとさまにはいえない、恥かしい親しき、肉親的な馴れを感じました。

やくざな男から、どうしても離れきれない女の気持に似た、うっすらした汚れを、わたしは彼との関係に、歲月の堆積に、感じたのです。

やくざな彼を、長い間からだのなかに庇ってきたような、みつぎつづけてきたような、自分もいっしょになって自分とそしてわたしの周囲を、騙しつづけてきたような、妙な後めたさを感じ

るのでした。

安静二度というのがわたしに課せられた療養の形でした。わたしは終日、手も足もない固く重くおっそろしく膨脹した左の胸だけのバケモノになって、遠い蟬せみしぐれか潮騒しおさいのなかに漂っていました。

お祭りの靖国神社の境内の見せものの娘のような気がするのです。頭は人間だが蒲団の下は膨れた胸だけの生きもの――

潮騒とも蟬しぐれとも思えるものは、左の耳の奥に絶えまなく揺れていて、それから解放されるのは眠っているあいだけなのでした。

ストレプトマイシンの注射によってそれはわたしのなかに始まり、毎日うつビタミンCの百ミリによってある程度に止められていました。

その音はときたま、突如として右側に突貫して、右耳の奥に一オクターブ高いチーンという冴えた、緊張したピアノシモになって何秒間かつづいたあとで、バコバコと右耳の鼓膜をお祭りの日の大太鼓のように乱暴に叩き、頭全体が大混乱に陥った末、やがて絃楽器の絃のいまにも切れそうな、せつないほど緊張した最高音になって、突然に止むのです。

その混乱のあいだ、神経のどの部分かがプツンと切れてしまいはしないか、よじれて、もつれて解けなくなってしまうはしないか、と恐れおののきながら、わたしはじっと、できるだけそおっと堪えているのです。

ストマイが太股に注射されると、一時間も経つとわたしの唇や舌や鼻腔や、左の顔半分は痺れてこわばり、左の胸の膨脹が増し、重さが加わり、固さがますますひどくなって、それはもうどうしても一枚の岩を抱えているとしか考えられなくなるのでした。

左の耳が、秒針のチクタクや、電話のある種の女の声をききとれなくなっていることに、ある日わたしは気がつきました。そしてまたある日わたしは、看護のクミ子を手渡してくれた小さい手鏡のなかのわたしの顔が、眉のあいだにあった二本の深い立じわがうすれて、ぜんたいに白くふやけて、呆やりした、啞者とか聾者とか五感のどの一つかが不自由な人々に共通した、脱落感というか、一種の暢気さ^{のんき}を湛えているのを見たのです。

馴染みのうすいその顔のなかにわたしは、いったい何を考えているのやら、幸福なのか不幸なのか、まるでわからない他人を感じ、持主であるわたしへの疎隔のようなもの、裏切のようなものを感じました。生きることの直接責任からズレてしまった平安さ、鈍感さは、なんとなくうす汚なく見えました。

医者ハストマイを中止しようかといいましたが、わたしはつづけることにしたのです。二十年あまりの執拗な彼との闘争が、何の犠牲も払わずに成しとげられるとは考えられないからなのです。現在の医学でストマイが一番強力な武器なら、わたしは左の聴覚を犠牲にしても、それをつかうことにためらいはしないはずでした。

鏡のなかのわたしは、ひどくふやけて、呆けて、少し痴^{ばか}のように見えました、しかしわたし

は精いっぱいに生きているつもりでした。わたしはいろいろのことを終日考えてはいたのです。結核患者は二百九十二万人いるという調査がでていました。いいえ、ほんとはもっともって三百万も三百五十万人もいるのでしょうか。わたしは彼等に逢うことはないのですが、しかし、そのなかのごく一部の人が、ときたまポツカリとわたしの前に現われるのです。

――ある貧しい、小さい家のなかの一つの部屋に、兄のK君と弟のU君がねていました。毎日、枕を並べてねていました。K君もU君も二百九十二万人の、いいえ、三百五十万人のなかの一人だったからです。

部屋の空気は二人の吐く同じ分量のタンサンガスに汚れてゆきました。二人の男臭い体臭に染り、混りあってゆきました。二人の寝返りや、咳きに揺れて動きました。

そしてあるときは相似た、あるときは正反対なことを想いつづける二人の、別々の想いを漂わせて窓から流れてゆきました。

いつも開けてある窓からは、空の一部が、隣の屋根が、もしかしたら一本の樹の梢こすえや流れる雲が見えたでしょう。

弟のU君は今度の戦争で片足を奪われた青年でした。二人はほんと仲のいい兄弟であったのかも知れません。相手の感じる不幸も、怒りも、焦燥も、忿懣も、療養の日々のなかにある小さ